

今週のメニュー

■トピックス

◇日本プラスチック加工研究会の大阪研究会5月度例会で講演
－PVCマーケットと最近の動向について－

■随想

◇古代ヤマトの遠景（86）－【歴代天皇と伊勢神宮（4）】－

木下 清隆

■編集後記

■トピックス

◇日本プラスチック加工研究会の大阪研究会5月度例会で講演
－PVCマーケットと最近の動向について－

名古屋のプラスチック金型メーカーが中心になって立ち上げた「日本プラスチック加工研究会」の大阪研究会に講師として招かれて、「PVCマーケットと最近の動向について」のテーマで5月13日に講演しました。参加企業・団体は、プラスチック金型・成形機メーカー、プラスチック加工・製品メーカー、配合剤メーカー、大学・試験機関などで、約40社が集って、2カ月に1回の頻度で研究会を開催し、情報交換を行っています。

この研究会の沿革を拝見すると、1988年に東京本部としてプラスチック関連技術者の有志メンバーによって結成され、1999年より、中部支部、関西支部へと発展しております。研究会の目的は、これまでの日本型経営の特徴である各企業別の縦割組織から抜け出し、グローバルな国際競争に打ち勝つ独自技術を開発するには一企業だけの技術だけではなく、多くの横社会の技術者の知識を集約し、より高度な技術を開発したり、海外に対抗して差別化できるレベルにすることとしています。会社の枠を超えたエンジニアの知的集合体としての機能を目指としています。

大阪研究会のメンバーでもある中部ビニール卸協同組合の森社長(森松(株))からお話を伺い、塩ビ関連の企業が多く集っていることから、最近の状況に関心が高く、標記のテーマでお話をしました。当日は、二つの演題で講演が行われ、最初に、自動車補修用資材や工業ライン用資材を扱っている(株)ソーラーの清水取締役営業部長と技術開発部の村田課長代理から、事業紹介と新規機能材料の説明が行われ、二つ目にPVCの講演を行い、約20名の方に熱心に聴講頂きました。



研究会の様子

はじめに、PVCの歴史に触れて原料ソースの比較を欧米と行い、国内PVCの用途別需要量の推移を説明し、PVCの構造的な違いから来る特徴に言及しました。更に、未だに一部誤解されている環境問題の現状と、新たな持続可能な社会への貢献でマテリアルリサイ

クル性などの環境特性に優れている PVC の実例を紹介しました。それらの実績をもとに、GPN 購入ガイドラインが見直され、塩ビの情報提供項目が削除されたこととお話ししました。

質疑応答では、塩ビへのビジネス面での関心が強いことから、具体的な実例でのアドバイスを求めておられ、今後への期待が込められました。

講演後に開催された懇親会では、個別の参加者から引き続き詳細な情報提供の要望があり、当協会の HP で公開している情報ソースを紹介しています。今後も、PVC に限定しないプラスチック全般でのネットワークをつないで理解を深めていくことが、新たな展望を広げていくことになると思っています。

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（86）－【歴代天皇と伊勢神宮（4）】－

木下 清隆

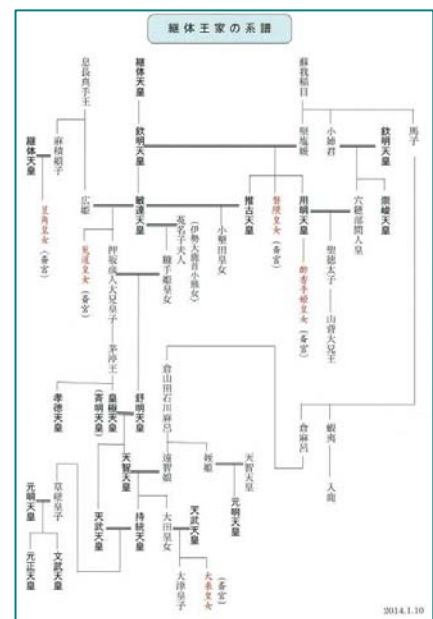
6) 舒明・皇極・孝徳・斉明・天智天皇

酢香手姫が推古二十九年（六二一）に伊勢から戻って以降、天武三年（六七四）に大来皇女が齋宮として遣わされるまでの約五十年間は、全く齋宮派遣は行なわれなかった。この間、舒明・皇極・孝徳・斉明・天智の各天皇が名を連ねている。皇極と斉明は同一人物なので全部で四人となるが、彼等が皆、非蘇我系の天皇であることを考えれば、なぜ齋宮の派遣をしなかったのかは謎である。更に日神の祭司に関心を示していないのは不思議なことである。

このような歴代天皇の対応は、初代倭王に対する取り扱いが、この時代に大幅に変更された、とでも考えなければ説明出来ない。要するに日神の立場に何か大きな変化が起きたのである。それが何であるか、具体的な因果関係は記されていないが、傍証となるものは残されている。それは蘇我氏による歴史編纂である。本考では一貫して蘇我氏が歴史編纂に深く係わってきたことを主張しているが、この五十年の空白を埋めるためにも、歴史の改竄が行なわれたと考えなければ説明が付かない。先に蘇我氏を検討した所で、彼等は自分たちの出自を韜晦するために、神武から開化天皇までの九代の天皇を創作したと述べたが、舒明から天智までの四人の天皇によって作り出された謎の空白を説明するためにも、神武天皇以下の創作が謎解きの鍵となる。

蘇我氏は恐らく敏達帝によってまとめられた倭国の歴史を、彼等にとって都合のいいものに改竄したと考えられるが、敏達朝までに既に出来上がっていた内容とはどのようなものであったかを、想定しておきたい。

欽明朝頃に『帝紀』『旧辞』が編纂されたとするのは、ほぼ定説のようであるが、本考では、蘇我氏が安閑・宣化の両帝を葬ったことから、そのことを隠蔽するために歴史の編纂が始められた可能性が高いことを述べた。このときの内容は、初代倭王即ち、櫛玉饒速日



継体王家の系譜 : クリックで拡大

尊から始まり、創作された安閑・宣化までの各倭王に関する記録程度のものであったと想定される。「帝紀の原型」のようなものである。

これを受けて敏達天皇の時代になると、倭国の創設者として天照国照彦火明櫛玉饒速日尊（以下饒速日尊にぎはやひのみことと略称する）の存在が明確にされ、その出自物語が附加されたと考えられる。要するに神代の創作である。その中心となったのは当然「神魂神」かむすのかみである。古事記に「神産巢日神」かむむすひのかみと出ている神である。恐らく「饒速日尊は神産巢日神の〇世の孫なり」といった基本的なことが記されていたと考えられる。更に旧辞の部分もこの時代に整理されたと思われる。その代表的なものが、神武東征の原型となった、初代倭王の大和入り物語である。



熊野大社 鳥居／拝殿

このような内容の帝紀・旧辞が敏達天皇の時代までに整理されていたと考えられる。この帝紀・旧辞が蘇我氏全盛の推古朝になると、更に全面的に書き換えられた。彼等の出自の隠蔽とこれに伴う各氏族の系譜構築のためにである。更に、この氏族系譜の構築には、安閑・宣化天皇謀殺の口封じがその最大の目的だった可能性が高い。先にも述べたように、ここでは安閑・宣化の両天皇は帝位に即いていないとしているので、その謀殺は皇子時代の話である。この事件隠蔽のためには、歴史の改竄程度ではとても防ぎきれないとの思いが蘇我氏側にはあったと思われる。このため彼等は各氏族の前に人参をぶら下げたのである。

このために、神武天皇以下開化天皇まで九代の天皇が創作された。ところが、このことで重大な問題が生じた。それは倭国の創設者が出雲の饒速日尊から日向の神武天皇に変更されたことである。当時は出雲の饒速日尊が倭国の祖神、日神として当時の人々に知れ渡り始めた時期である。ところが、倭国の創設者は実は神武天皇であり、その出自は日向国であるとなると、これを人々に納得させるためには壮大なからくりが必要となってくる。それが「出雲の国譲り譚」である。

更に神武天皇の前に長々とした神代物語も必要となってくる。神産巢日神をそのままにして置く訳には行かない。このため高御産巢日神が創作され、高天原の最高神に格上げされた。天照国照彦火明櫛玉饒速日尊も隠蔽しなくてはならない。そこで、この尊の名称から火明命と饒速日命という二人の命を誕生させた。

火明命の方は、邇々芸命の兄に仕立て尾張氏の祖という系譜を創作して、出雲とは無縁にした。饒速日命の方は、大和の王の地位を与えるが、後から来た神武天皇にその地位を譲り渡すという役割を与えて処理する。更に饒速日命は物部氏の祖であると明記し、当時落ち目であった物部氏のイメージを重ねて、饒速日命のイメージダウンを図った。

このようにして現在残されている古事記・日本書紀の基本的な内容は、蘇我氏によって創作されたといえる。この蘇我氏による倭国歴史の改竄によって、日神は宙に浮いてしまった。倭王家の祖でもなければ、倭国の祖神でもなくなった。伊勢神宮という一地方の神社に祭られている神にしか過ぎなくなったのである。

このような立場に貶められた日神をいまさら、内親王を派遣してまで祭祀するのか、という問題がそれぞれの天皇に出てきたとしても不思議ではない。初代倭王への思い入れか

ら伊勢神宮へ齋宮を派遣するためには、蘇我氏が創り上げた壮大な歴史観を打ち砕き、再度、出雲に立脚する歴史を再構築するしかない。大義名分がなければ天皇の立場として、饒速日尊の祭祀はできないのである。しかし、四人の天皇の時代は情勢が不安定であり、権力基盤も脆弱であった。とても蘇我氏の歴史観を覆し、旧に復するようなことの出来る時代ではなかった。このような事情から、四人の天皇は齋宮派遣を断念したのである。

蘇我氏によって新しい歴史観が生まれたことで、酢香手姫の帰京の理由は、これまでのような健康問題だけではない可能性が出てきた。彼女は用明天皇が踐祚した年に齋宮として派遣され、三十七年後に戻ったとされている。この三十七年を計算すると酢香手姫の帰京は推古二十九年となり、天皇紀・国記類が編纂上梓された年の翌年となる。これは偶然なのかである。偶然でないとするれば、酢香手姫は前年に完成された天皇記・国記の内容を知ったのではないかと想像されることになる。

この当時、伊勢神宮は中臣氏の管轄下にある。しかも中臣氏は仏教導入で蘇我氏とは激しく対立した間柄である。その彼らは推古天皇に渡された天皇記・国記の内容を窺い知ることのできる立場にあったと考えられる。彼等は、一読して仰天したに違いない。その驚きが酢香手姫にも伝わったということであろう。彼女は自分の人生をかけて守ってきた日神が貶められたことに愕然とし、最早、齋宮としての務めは出来ないと感じたのではなかろうか。それに自分の体力の衰えもあったであろう。こうして彼女は帰京を決意したのではなかろうか。

話は前に戻るが、最初期の『帝紀』に登場したと考えられる「神魂神^{かもすのかみ}」について少し補足しておきたい。

この神魂神は出雲では極めて重要な神で「出雲国風土記」の随所に登場するし、更に平安時代初期の『新撰姓氏録』では著名な神として扱われている。『新撰姓氏録』においては、天皇を祖とする氏族を「皇別」とするのに対し、神を祖とする氏族を「神別」としている。この神別氏族には、四〇四氏の氏族名が上がっているが、この内六三氏がこの神魂の神を祖としている。これは饒速日命の一〇四氏に次ぐもので、当時においては甚だ高名な神だったことが知れる。この神は本来、出雲の熊野大社に祀られていたと考えられるが、熊野大社が素戔嗚尊の祭祀を引き受けたことから話がややこしくなり、現在この神を祀る神社は出雲には存在しない。

熊野大社の6kmほど北方の、松江に程近いところに神魂神社はあり、そこで祭祀されていると考えたいところであるが、その祭神はイザナギ・イザナミ尊となっており、意外な祭神である。なぜ、イザナギなのかについて、今のところ第三者による明快な説明は見当たらないようであり、この疑問については、この後の回で述べることにする。



神魂神社 鳥居／本殿・拝殿

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いです。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 編集後記

いよいよ梅雨の季節となりました。今年の冬は例年以上に厳しい気候でしたが、その原因になっていたのが、南米ペルー沖の海面水温が低い状態が続く「ラニーニャ」現象の影響と言われています。気象庁の発表によると今後は「エルニーニョ」レベルまで海水温が上昇傾向にあり、そうすると今年は冷夏になる恐れがあるとのこと。日本の景気のことを考えるとやはり「夏は夏らしく」「冬は冬らしく」が理想で、特に消費税を来年 10% まであげたい日本政府としても気になるところでしょう。東京の暑い夏を経験したことのない私にとってはありがたい話ですが、景気のことを考えると複雑な気持ちです。(鷹山)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 高橋 満

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp